

「結婚」(後半)(翻訳) “A Marriage” (The Last Half) (Translation)

坂 淳一 Junichi SAKA 訳
メアリー・ラヴィン Mary Lavin 著

ジェイムズにしてみれば、この口論のことで最も理不尽に感じたのは、その夜、真っ先に眠りに落ちたのがエミーだったことである。彼の方はまだ、飾りボタンが床に転げ落ちないようサイドテーブル上のトレイに置いたり、汚れた靴下をカーベットに投げ出して引き出しから翌日の靴下を出したりしていたが、そのとき異様な静けさに気づいたのだ。エミーはもう眠っていた。その顔を見ながら、この皮肉な展開にふとした可笑しさを覚えたが、すぐにまた翌朝の準備に戻った。ネクタイをはずし、次に着るシャツに似合うネクタイを選び、ズボンを脱いで丁寧に広げ、それを寝室用の椅子の背もたれに載せた。二人とも夜はきまつてそこに服を置くのである。

これも一日おきの習慣だが、エミーの服はきれいに畳まれて椅子の座面に置かれ、正方形をした小さなピンク色のサテンの布がかけてあった。すでにその銀色の縁取りも変色していたが、その布はエミーが少女時代から大切にしていたものだ。昼の間は、夜に着る服がそれに包まれていた。二人が結婚したての頃は、彼女が修道院の付属学校にいた時分のこうしたさやかな思い出の品を、彼も微笑ましく思ったものである。よく彼女に、君は猫のような潔癖症だねなどと言ったものだが、そんな風にからかいなながらも、何も知らない初な女の振りなど決してしないその潔さへの讃辞のつもりだったのだ。だが今夜は、やりきれない気持ちでその惨めなピンクのサテンから顔を背けた。その下には色褪せた衣類があると分かっていたからである。ピンで留めたシヨルダール・ストラップや裂けた縫い目、破れたヨーク、木材に打つたりベットのよう仕付け糸で大きく黒々と補修された当て布などが隠されているのだ。我慢にも限度というものがあつた。これは笑い事ではないと自分に言い聞かせながら、彼はジャマに着替え、ベッドに入って妻のわきに身を横たえ、眠りにいざなう魔法の杖が自分を打ってくれるのを心待ちにしていた。

ところが参ったことに、眠りは訪れてくれない。横になつたままいつまでも眠られず、一方となりではエミーの寝息がほとんど聞き取れないほど静に続いていて、不眠症についての苦情を聞か

された後なだけに、まるで馬鹿にされているような気がした。しばらくすると、自分が眠れないのはこの寝息のせいではないかと思えてきた。もしそうだとしたら、いつもはベッドの向こう側で彼女があちらこちらへと寝返りを打っている間も、こっちは平気で眠り続けているだなんて、信じろと言う方が無理な話だ。人は皆、夜寝ている間に何度も寝返りを打ったり、枕をたいたたり、毛布を引っ張り上げたり剥いだりするというのはよく知られたことだ。それなのにエミーは、彼女が何度ベッドサイドの明かりを点けても、私は目を覚まさないでいると信じろと言うのか？ 彼女はよく起き出しては下の階に行き、ポットにお茶を煎れ、それをトレイにのせてベッドのところまで持ってきて、何時間も本を読んでいることもあると言っていた。そんな無茶な話、とても信じられるわけがない。この夜、よく眠れないという彼女の訴えはなんと空しく響いた。肉体的ではなく精神的な誘惑を感じて、彼女は彼女にすり寄り、本当に眠っているのかどうかを肘で突付いて確かめたいと思った。少し話をすれば気持ちがほぐれるような気がしたのだが、そこまで下卑た真似をすることも出来ない。そんな風に悶々としていたらますます気が張ってきて、ついにはもう一睡も出来ないのではないかと思えてきた。すると穏やかならぬ考えが頭に浮かんだ。これから毎晩こうして眠れなくなるのではないだろうか？ 馬鹿な！ 自分はそう簡単に打ち負かされるような人間ではない。いざとなれば、いくらでも鎮静剤だつて売っているんだ。だがそれならば、もしエミーが本当に不眠で悩んでいるというならば、何か錠剤でも丸薬でも飲んで対応すればいいではないか。薬は使いたくないなんて言つたつてダメだ。今の今まで自分だつて薬なんか良くないと思つていたが、こんな夜がもう一晩でもあれば話は別だ。自分たちくらいの歳なら、薬を飲むようになったからといって何も問題はないだろうか？ 実際、もし記憶が間違つていなければ、彼女だつて一回何かの錠剤を試している。た

所属 多文化コミュニケーション学科 英語英米文化専攻
准教授

だ、自分には効かないと彼女は思ったのだ。だとしたら、なおさら馬鹿げている。選ぶ薬を間違えただけではないか。医者に電話して、別の処方箋を出してくれと頼めばいいんだ。いや、それよりむしろ朝になったら私が彼女の医者にも電話して、個人的に相談した方がいいかもしれない。この数ヶ月の間に、そうしようと思ったことも一回か二回はあった。でもいつもタイムリングが悪かった。たいてい他の用事で忙殺されている時に限って思いつくんだ。メモ帳にそう書いておいたほうがいいんだが、メモ帳は研究室だ。起き出して何かの紙にちよつと書き込めばいいか。奇妙なことに、そうする前にジェイムズは眠りに落ちてしまった。

* * *

はっと気づくと朝であった。少なくとも、寝室はもはや真暗ではなかった。時計の目覚ましが壊れたのだろうか。彼は戸惑った。外では一羽の小鳥がちゅんちゅんとさえずっていたが、それに呼応する鳥はいなかった。一日の始まりを告げる使者が来たと考えする必要はなさそうだった。起きる時間ではあるまい。まだ疲れも感じられるので、充分に眠ってはいないはずだ。エミーを起こそうかという思いが心をよぎったが、寝る前の会話を思い出してやめにした。彼は再び目をつぶった。少しして、彼はまた確かめるように片目を開け、カーテンの縁が明るくなっているのを見た。それはもちろん、カーテンがきちんと引かれていなかったということであろうし、外は明るい月夜なのだろう。彼はもう一方の目を開けた。ベッドサイドのテーブルに置かれているものがぼんやり見えたが、時計だけは見えなかった。変な角度に置かれていて、ちょうど文字板が見えないようになっていたのだ。ジェイムズは石のようにじっと横たわり、ほとんど息もできないでいたが、やがて、もしエミーがまだ横に寝ているのだとしたら、どれ程静かなものであろうと寝息が聞こえるはずだと思っただ。犬を出してやるために下に行ったのか？自分も今回は犬の声で目が覚めたのだろうか？

耐え難く不快な状態で横になっていたが、今維持している硬直した姿勢を続けていたら、すぐに体中がつかれるのではないかと思えてきた。そんなことになったら厄介だ。手を伸ばして、エミーはまだベッドの中にいるかどうか確かめてみた方が良く心に決めた。すると何かに強いられたかのように、二人が初めて一つのベッドで寝た夜のことを思い出した。その夜は二人ともよく眠れなかったが、翌朝彼は、眠りに落ちていた時でさえ彼女が自分の腕の中にいることを意識していたと、誓って言うことが出来た。エミーもまた、その夜、彼のことを全く意識しなくなる瞬間はなかったと断言できた。

結婚した日の夜から何ヶ月もの間、二人は堅く抱き合っただまま眠っていた。しかし当然ながら、時が経つうちに、とりわけ蒸し暑い夜などには、本当に眠りに落ちる前に暗黙の同意でお互いから離れるようになった。そんな時でも、目覚めてみると腕だけはからめ合っていたものだ。

無理からぬことだが、エミーが初めて妊娠したことによって、二人の寝る時の習慣が変わった。彼女は寝ていて不快なまでに暑く感じるものが多くなり、毛布は一枚で沢山になったが、彼女の方は季節を問わず二枚でも足りたことがなかった。

彼女の最初の妊娠期間中、彼は文字通りマツトレスの端で眠り、それまでと同様に彼女のことを一晩中意識していたが、その意識は痛々しく神経質なものに変わっていた。自分が膝や肘を動かした拍子に、お腹の子供を傷つけやしないかと心配していたのである。エミーは笑って、子宮の中の子供はしっかり守られているから大丈夫だと請合っただが、彼はなかなかそれが信じられなかった。ところがある日、子供が子宮の中で初めて飛び跳ね、それからは彼の方が胎児のひじやかかとで突付かれるようになった。

その頃でさえ、間に大きな胎児がはさまっても、二人は毎日同じ瞬間に目覚め、その時に交し合う眼差しは愛撫のように優しくなっていた。

ああ、あの魔法のような日々。もう久しくジェイムズはその頃

のことを考えていなかった。金の心配や学者生活のストレスが彼の上に暗い影を投げかけ、過ぎた日々の記憶を奪い去っていたのだ。他の夫婦はそうかも知れないが、彼らが若かった頃、二人に魔法をかけていたのは若さそのものではなかった。彼の生活は、初めてエミーを見たその日までは暗澹たるものだったのである。

二人の目が合ったのは、ジェイムズが一年生にしていた講義の真最中で、その瞬間から彼は別の世界へと運び去られていた。その女子学生は後ろの方の席に座っていたが、まるでその手で直接触れられたかのようにであった。そして目を離れた時、彼は激しく動揺した。彼女が何千マイルもの彼方に去って、埋めようのない距離ができたように感じたからである。再び彼女の方に視線を向けながらも、まだそこにいてくれるとはとても信じられなかったが、二人の間には何列もの学生の席があったにも関わらず、教室内の他の者すべてが淡い空気の中に溶けてゆき、二人は心臓の音さえ聞こえるくらい近くに思えた。

彼は彼女に話しかけねばならないと分かっていた。それもその日でなくてはならなかった。その日は学期の最後の日で、翌朝からは長い夏休みに入るところだったのだ。

でっ上げの下手な口実のもとに、彼は授業の後、廊下で彼女を待ち伏せしていた。彼女がその夜出発して三ヶ月をインスブルックで過ごすと言った時、彼は思慮も分別もかなぐり捨てて、手紙を書いてもいいだろうかと思ねた。

ああ、あの手紙の数々！彼女が何を書いてきたかはほとんど気にもとめなかった。彼はただ自分が目にした彼女の筆跡と、その封筒の手触りに恍惚としていた。一度、彼はアパートの郵便箱の鍵を失くしたことがあった。彼は手を突っ込んで、自分宛の手紙がないかどうか、手探りしてみなければならなかった。彼女の手紙が指に触れた時、何の変哲もない封筒だったので、どれほど心が震えたことか。

あの魔法はどこへ行ってしまったのだろうか。考えてみれば、魔法が消えたなんて、もう何年も気づかなかった。長年、彼は何の不満もなく、良い生活、家族の安らぎ、愛情、献身、そして何よ

り心遣い、あのゆきとどいた心遣いなどをその代用品として受け入れてきた。しかし最近になって、こうしたものが愛の始まりに感じたあの幸福感の代わりにはならないと分かっていたのだ。

一方エミーは、結婚のすべての段階が予想通りのものであるかのように、ずっと振舞ってきた。結婚した頃、まだ盛りを一日過ぎたくらいでまったく萎れてもいない花を、いとも無造作に彼女が捨てるのを見てひどく驚いたことがある。今になってみると、それはある意味で象徴的な出来事のように思われた。お茶の葉や野菜の外側の葉以外にも捨てる物がある嬉しいという様子で、せっせと花を集めてはコンポストの上に捨てていたので。彼女は庭の隅にそのコンポストを作り、ほどなくそこに大変な喜びを感じるようになったが、それは彼女が花壇に寄せていた喜びにも劣らぬほどだった。もちろん、それは二人がまだ町に住んでいた頃の話である。農場に移ってからは、彼女のコンポストの山は巨大なものになり、彼自身も喜んでそれを使わせてもらい、ジャガイモやサトウダイコンのような作物の上にトラクター数杯分も撒いたりしていた。

明らかに、女性は男性よりもすんなりと自然の定めを受け入れるようだ。しかし念のために言えば、そもそもエミーは若い頃から、いかにも紳士的な態度を彼に期待するようにはなかった。げんなりするような老妻のためにぎこちなくドアを開けてやったり、椅子を引いたり、馬車の長柄に戻る雌馬みたいにコートの中に戻ろうとする妻のコートを保持してやったりするようなお目出度い老夫婦を二人は軽蔑していたのだ。彼は一度も浮気はしたことがないし、浮気心を起こしたこともない。それも彼が、二人をお互いの腕の中へと導いていた、あの魔力を追い求めていたからだ。彼女の方は、それが失われたことを当然のことと思っていた。子供を授かった喜びや、子供が大きくなってからは、生活上の細々としたこと、例えば食事などに集中して、その埋め合わせとしていたのだ。ここで突然、ジェイムズは新婚旅行で起きた別の小さな出来事を思い出した。二人はコモ湖を訪れていた。小さな蒸気船でベッラージョからカデナツピアに渡る途中

で、ホテル・ヴィッラ・セルベッローニ*の素晴らしい庭から花の香りが漂ってきたのだ。その刺激的で甘い香りは息を飲むほどであった。エミーはその花をつきとめ、妙なことを口にした。

「野生のシクラメンだわ！とても小さな花なのよ。こんな水の上に漂ってくるほど香りを出すんだから、きつともものすごい数だわ。ささやかなご利益しかないのに、まんまと騙されて、こままでのこのこやってくる可愛そうな蜂たちのことを考えてみて」そう言っただけで彼女は笑い、「自然って、本当に上手く騙すのよ」と言っていた。新婚旅行で若い女の子が言うセリフとしては変じゃないか？そして今、何年も何年も経って初めてジェイムズは思ったのだが、彼女は彼が思っていたほど調子に乗って適当なことを言ったわけでもなかったようだ。だが、そうと分かって良かったのか悪かったのか、その時点では彼には何とも言えなかった。ここで、彼は目をしばたいた。またウトウトしてしまっただけか？今では部屋も太陽の光ですっかり明るくなり、外では、今度は一羽ではなく何百羽という鳥たちが大騒ぎをしていた。あわてて掛け布団をはねのけ、止まっているのかと思っただけで時計をつかんだ。すると突然エミーがドアから入ってきた。すっかり服を着て、お茶のトレイを持っている。

「私が目覚ましを止めたのよ、ジェイムズ。毎朝毎朝、あの耳をつんざくような音で電気ショックでもかけたみたいで活動させられるのが、いいわけじゃないもの。それに、覚えていてでしょう、ゆうべ、あなたに話したいことがあるって言ったのを。でもタイミングが悪かったみたいだから」

ジェイムズはいらいらしながら時計を見た。今ならタイムミングがいいとも言えるのか？「いいかい、エミー、それは今夜まで待たないのか？」彼はベッドの縁越しに片足を伸ばして服を取ろうとしたが、彼と椅子の間にはエミーがいた。彼女の言いたいことが何であるにせよ、胸の内にあるものを全部吐き出させ、話の要点を伝えてもらい、話し合いに値することなら帰宅してから話し合うことに同意させた方がいいと思っただけだ。「一体、何なんだい？」と彼は尋ねた。

今度はエミーが時計を見た。「ジェイムズ、今回だけでいいから、大学に電話して今日は休むと言ってくださらない？」

「君、気は確かか？言うことがあるなら、さっさと話してくれ。ちゃんと聞いているから」彼女がいささか面食らっているのを見て、彼は内心喜んだ。

「どこから始めたらいいか分からないけど」と彼女はつぶやいた。しかし彼女には分かっていた。適切なところから話を始めたのだ。

「先週、私がダブリンに行った日のことを覚えている？」

滅多にないことなので、彼はもちろん覚えていた。それどころか、彼女が車を芝生に停めてしまった日だと特定することもできた。

「どうして私が出掛けたか話すわ。お医者様に会うためよ」彼の驚きは無視して、彼女は話を続けた。「町に住んでいた頃、私達みんなにとっても親切にしてくれた、あのお医者様よ」

医者だっけ？彼は啞然とした。後ろに倒れて枕の上に横たわった。頭に激しく血が昇り、視界がすすんで、一瞬目の中に血が流れ込んだかと思っただけだ。「おい、エミー、どうしたんだ？何でそんなこと、黙っていたんだ？医者は何だっけ？君に何が起きたんだ？どうしてもっと早く言わなかったんだい？」彼は立ち上がって抱きしめてやりたいと思っただけで、最近の色々と彼女に不実なことばかり考えていたので、それも出来なかった。ああ本当に、自分は何で馬鹿なんだ！もし彼女に何かあったらしたら、手足をもぎとられたような気がするだろう。彼はまた彼女に両手を差し伸べたいと思っただけで、今回は自ら気持ち悪く落ち着けた。私を取り乱したりしてはいけない。いや少なくとも取り乱しているところを見せてはいけない。「いいかい、エミー。少なくとも君を最高の医者の所に連れていくためにも、きちんと話してくれた方がいいんだ。あの頑固爺さんはほくらに親切だったかもしれない——いや、実際親切だったよ、でももういい加減高齢で、一千光年も時代遅れだ——たぶん医学の進歩には全くついてゆけないと思う。もちろん、ぼくは今日、家にいるよ。わざわざ大学

に電話する必要もない。でも君はまだあの爺さんが何と言ったか話してないよ」すっかり取り乱したまま彼は彼女を見て、二人の目が合った。ジェイムズは一瞬うろたえた。何て若い目をしているんだ。まるで少女の目だ。どうしてぼくらはこのところお互いの目を見ることがさえなかったのだろう。きつとそこが愛情の隠れ家で、体の他の場所が愛情をかき立てる力を奪われてもそこに潜んでいるんだ。「なあ、エミー、一体どうしたんだい？早く話してくれ」彼の目は依然として彼女の目を見つめており、彼女の体をつかまえて自分に引き寄せようとした。

そつと、エミーは彼を押しつけた。「あなたに説明したいことがあるのよ、ジェイムズ。私が出掛けたのは、私のことをお医者様に相談するためじゃなかったの。あなたを診てもらおう予約をするためだったのよ」

「ぼくを？」ジェイムズは、始めは物も言えないほど驚き、ついで怒りを爆発させた。「よくもぼくの生活に干渉した、いや干渉しようとしたな！」彼は彼女を睨みつけ、彼女は睨まれてたじろぎ、どうしてよいか分からなくなった。

「ごめんなさい、ジェイムズ。そんな風に受け取られるなんて、思ってもみなかったの。本当よ」彼女はそう言って、それから少ししっかりとした口調になった。「私はとにかくそうしなくちゃいけないって思ったの。あなたは町とこの間を車で長い時間運転することからくるストレスに目をつぶってきたけど、特にここ数年はひどかったでしょう？あなたももう若くはないんだから。それにその影響をまともに受けてきたのは私なのよ。最近のあなたはほとんど我慢の限界よ、私が何か言うたびにガミガミ叱るし。短気で、人を馬鹿にして、いつも刺々していて。あなたのためと同じくらい、私自身のためにお医者様に会いに行つたと言つてもいいくらいよ。はっきり言って、あなたは退職すべきだよ。そうでなければ、ここは売って町に戻るべきよ」彼の顔が一層暗くなるのを見て、彼女は少し引き下がった。「別にお医者様がそうしろと言つたわけではないのよ。まずはあなたのことを診てみなくては分からないもの。少し休みなさいと仰るかも知れないわ

ね。強壯剤を処方するだけかも。ねえ、ジェムズ、あなたがいなかったら私の生活はどうなってしまうか考えてみて」彼女の目に涙が浮かんだ。

ジェイムズは、突然医者に行つたりした彼女の無鉄砲さにまだ驚いていたが、それでも自分が彼女に対して考えていたのと同じことと同じことを彼女が言い出したという偶然に、衝撃を受けていた。そしてもちろん、彼女の言うことにも否定出来ない点があると分かつていた。この数週間は、いつになく疲れていたのではなかったか？健康診断など、何才で受けても別に害はない。彼は少し気持ちが悪く着いた。

エミーはもちろん彼の変化を素早くとらえた。「あなたは退職すべきだと思おうわ」と言って、口をはさまれる前に先を急いだ。「収入が減つたらやっつけていけないなんて振りはしなくていいのよ。年金の三分の二は受け取る資格があるんでしょ？私はね、生活水準が少しくらい下がっても平気よ。車二台が一台になるとか、そういうことなんか、私たちの関係が一刻と壊れてゆくのを見ている苦痛に比べれば」彼女は急にすすり泣きし始めた。

「泣くんじゃないよ、エミー」とジェイムズは言った。彼女が気に掛けてくれていることは喜ぶべきことだと分かつていた。的外れであろうとなかろうと、自分のことを心配してくれるのは彼女だけじゃないか。子供たちは？少しの間、彼は子供たちのことを考えた。子供たちも彼のことを大切に思っているだろう。しかし、一番気に掛けているのはそれぞれの妻や夫であり、言うまでもなく自分の子供たちであった。「エミー、怒鳴つたりして悪かつたよ。でもぼくが退職するっていうのはあり得ない話だ。そんなことをしたら大学が困るだろうからね。でも少し休むとか休暇を取るといいのは良いアイデアかも知れない。何日間か家にいられれば、ぼくはそれでいい。それだけなら医者の診断書も要らないし」彼の口調は心ここにあらずという感じであった。と言うのも、もう何年も休暇を取っていないし、一日休んだというのもずっと以前のことで、その日のことを思い出せないくらいだということに気付いたからである。「いいかい、エミー」と彼は衝動

的に言った。「君に何かあったんでなければ、ぼくはもちろん今日は家にはいない。一日中は、っていう意味だよ。でももし君がぼくと一緒に町に来たいって言うなら、電話をかけて遅くなると言うことはできる。どうだい？ぼくの仕事が終わるまで町でぶらぶらして、一緒にどこか小ぎれいな店で晩御飯でも食べて楽しんでどうか？どう思う？」

「悪くはないわね」とはつきりしない口調でエミーは言った。

「あなたがお医者様に行つてくれるなら私も行くわ。予約なしでも会つてくださると思うし、こんな状況なんだから」

こんな状況？どんな状況だつて言うんだ？「そんなのは論外だ」きついことを言うつもりではなかった。この一言は悔やまれたが、幸い彼女は気にしていなかった。どのみち一緒に来る気はなかったのだからと彼は思った。彼女は着古しの園芸用の服を着ていたし、さしたる熱意も見せず、ただ招かれたので儀礼的に応じただけであつた。考えてみれば、彼の立場からしても、それは様々な理由であまり良い思い付きとは言えなかつた。一つには、そうなると思つたら一緒にいらなければならぬだろうし、今日はどうもそれは具合が悪い。それに加えて、もし彼女が来れば、彼女は自分の車を売るようなことを口にしてしたが、それを具体的に話し合うことになるかも知れない。たぶんそうした方がよいのだろう。実際彼女は減多に車を使わないのだから。まあしかし、そんな話は夜になってからでも出来る。「どうだい？どのくらい時間があれば準備できる？」自分の言い方にはあまり熱意がないなど自分でも思つたが、彼女は気付いていないようだった。「また今度ね、ジェイムズ」と彼女は言った。「あなたが私の言ったことを理解してくれた頃に、町で一晩楽しみに行くわ」ジェイムズはこれを聞いて内心ほっとしたのだが、それでも本能的に彼女の気持ちをもう少し明るくしてあげてから出発すべきだと考えた。それは二人のためだった。他に何か言えることはないかとあれこれ思いを巡らせて、彼は偶然、可笑しな話を思いついた。

「そうだ、エミー、君がぼくを病氣だと思つて医者に行つたり

したせいで、ある女性のことを思い出したよ。その人は懺悔をしながら自分の罪を告白した後で、自分の亭主の数々の罪について延々と話し始めたんだ。聴罪司祭がどうしたと思う？その女の人のためにはアベマリヤの祈りを一つしただけだったけど、亭主の方の罪に対してはロザリオ十五玄義の祈り*を全部唱えるように彼女に言ったそうだよ「これは上手くいった。彼女が笑つたのだ。」

「じゃあね」と言つて、彼女は彼女の方に身を寄せて軽くキスをした。ようやく自由の身となつて、ジェイムズはもう一度ズボンを取ろうとした。エミーがすでにそれを手に取つて、ぼんやりしながら折り畳んでいることには気付いていなかった。「おい、気を付けろ。」と彼は叫んだ。遅かつた！尻のポケットから、小銭や鍵やその他細々したものが雨あられと床に落ちてあらゆる方向に転がってゆき、硬貨の大半はベッドや椅子や整理ダンスや衣装ダンスの下に入ってしまった。この時彼をとらえた憤怒に比べれば、先程の怒りなど何でもなかつた。「何だつて、そんなことするんだ？」と問い詰めながら、彼は膝をついてベッドの下を探り、とりわけ車の鍵と駐車場係のチップが払えるだけの小銭をかき集め始めた。

自責の念に唇を噛みながら、エミーは手伝おうとした。

「手を貸さなくていい！」冷たい笑みを浮かべながら彼は言った。「それより何でこんな馬鹿げた真似をするのか説明してもらいたいね。嫌がらせのつもりか？」

「分からないわ」とエミーは答えにならない答えをし、それ以上の手伝いは慎んだ。しかし彼女には分かっていた。そして出し抜けるに、その理由を話し始めた。「きつと嫌で嫌でたまらなかつたからよ。始めつからだわ、あなたがあの椅子にズボンを掛けておくやり方、チャックを開けっ放しにして。それつとつて——」彼女は言葉を探した。「——とつてもいやらしいのよ。あれじゃあまるで——」

彼は最後まで言わせなかつた。「そこをどいてくれ」と叫び、彼女の足音が階段を駆け下りてゆくまで、彼女が部屋にいるのかどうかほとんど意識の外だった。

またたく間に彼は身支度が出来たが、ネクタイを結び終える前に窓辺まで行き、エミーが外に出て庭の方へ歩いてゆくのを複雑な心境で見ている。彼女は間違いなく朝食の用意をしておいてくれただろうが、これ以上ぐずぐずして食事までする気もなかった。彼は窓から身を乗り出して、行ってくるよと叫んだ。彼女の耳には届かなかった。明らかに、彼女は大切なコンポストの山をかき混ぜに行くところだった。堆肥用の鋤を持って、彼が昔履いていた長靴に足を突っ込み、締め紐をはずしてあるのだから間違いない。あのコンポストの山さえあれば、彼女に人との付き合いがなくても哀れむ必要はないのだ。

次の瞬間にはもう、ジェイムズは庭の中の車道を車で走ってゆくところであった。年老いたスパニエル犬は、彼が去っていくのを見守っていた。犬の本能には実に驚くべきものがある。この犬も、朝は決して車についてゆくとはしない。ご主人様は一日中いなくなるのだと知っていて、ただ走り去る車を悲しげに見送るのである。ジェイムズが内門を開け、車を出し、また門を閉め、車の中に戻るまでに様々な連想が脳裏をよぎり、結婚したばかりの頃に飼っていた別の犬のことを思い出した。プードル犬で、とても可愛かった。皆その犬が好きだったが、子供たちは特にそうであった。ところがある日その犬は発作を起こし、何度か発作を繰り返したので獣医を呼んだ。獣医は翌日の早朝にやって来て、人道的な解決方法の一つしかないと言った。彼はその場で処置を行い、二人が呆然としている間に去って行ってしまった。しかし二人に悲しんでいる暇はなかった。ちよつとした危機が迫っていたのである。子供達に死んだ犬を見せるわけにはゆかないからだ。遺体はすぐに埋めてしまわなければならない。問題は、使用人達が来るまでには一時間もありません。問題は、使用人達に向けて出勤する時間を過ぎていたことである。彼とエミーとで犬を埋めなくてはならない。となると、問題はさらに大きくなる。夜の間には霜も生じないほどの凍寒があつて、地面がカチカチになってしまい、ジェイムズの力では鋤を使つてもつるはしを使つても掘れなかったのだ。

「私達に出来ることは一つしかないわ」子供たちが起き出した物音を耳にして、破れかぶれな様子でエミーが言った。「コンポストの山の中に埋めるのよ。土が柔らかくてちゃんと埋められる大ききの穴が掘れるのはあそこしかないわ」それは口にするまでもないことであつた。そうするしかなかったからである。彼も同じことを考えてはいたのだが、口に出して言うのをためらっていたのだ。この時もエミーには驚かされた彼であつたが、数週間後には、彼女のあまりの無神経さに愕然とした。

「いつになったらまたコンポストが使えるかしら」と彼女は尋ねたのだ。それって、いつになったら犬が分解するのかというのか？すると奇妙なことがあつた。奇妙な、と言うより気味が悪いと言つた方が当たつている。その頃雇つていた使用人はネッドという名の年寄りだつた。その夜帰宅した時に、ネッドが彼を待っていた。「奥さんに知らせた方がいかな、と思うことがありましてね」とネッドは言った。「お二人で犬を埋めたコンポストですけれどね、奥さん、もうすぐあそこが使えますよ。今日はちよつと時間があつたんで、鋤を持ってきてどのくらい進んでいるか見てみようと思つたんですよ。いい感じですよ。かなり進んでます。毛は全部なくなつてますし、背中の辺りは皮も溶けてきてます。夏前には骨だけになりますよ」確かに少々気味の悪い話ではあつたが、その年寄りの気楽な話し方には、二人とも、彼もエミーも、大いに笑つたのである。

この時までには、ジェイムズは外側の門の所まで来ていたのだが、その出来事や、この農場で暮らし始めたばかりの頃を思い返しているうちに、彼は妙な気分になつてきた。今朝の口論のせいで気が動転している。エミーと一緒に来てくれと、もつと熱心に説得すればよかつたと思つた。引き返してもう一度頼んでみようかとも思つたが、車を返すだけの元気がどうしても出なかつた。彼はハンドルを握つたまま座つていた。エミーが自分の健康についてあんなことを言うから、きつと心がかき乱されているんだ。彼女が病氣かと思つた時にどれほどぎょつとしたか、また彼女の目を見つめた時にどれほど感動したか、彼は思い出し

ていた。深いため息をついて、彼は身を起こし、車のドアを開けたが、外には出ずに目を閉じて頭をシートにもたせかけた。するとその時、顔に暖かな息を感じ、暖かな体がのしかかってくるのを感じた。エミーか？彼女が彼の後を追ってきたというこの狂気に似た考えは、熱くて湿った舌が、彼の顔を、手だけでなく顔までも、ペロペロと舐め始めてたちまち吹き飛んだ。それは年老いたスパニエル犬だった。こいつ悪魔でも取り憑いたのか？何で追いかけてきたんだ？どうして自分がまだ遠くに行っていないと分かったんだ？「降りろ！出て行け！」と彼は命令した。犬は気にも留めなかった。変化があったとすれば、舐め方が一段と激しくなっただけである。ジェイムズはその犬を手で押しのけられるよう身を起こした。しかし、結局犬の方が彼よりも力が強いと分かっただけだった。犬はいつまでもいつまでも舐め続け、ジェイムズはついにあらがうのをやめた。彼は目を閉じて、そのままシートに頭をうずめた。

(終り)

訳註

ホテル・ヴィッラ・セルベッローニ……イタリア北部の観光地、コモ湖畔にある一八七三年創業の最高級ホテル。そのすぐ南にあるベッラージョに遊覧船の発着場がある。

ロザリオ十五玄義の祈り……ロザリオはカトリックの数珠であるが、そもそも祈りの回数を数えるためにある。全五連からなり、各連は一つの大珠と十の小珠からなる。すなわち一周で大珠五つと小珠五十があり、これが一環という。大珠では主禱文を唱え、小珠では天使祝詞を唱える。ロザリオ十五玄義は、イエス・キリストと聖母マリアの喜びの玄義五端、苦しみの玄義五端、栄えの玄義五端の、計十五端の玄義のことである。これらの玄義を黙想しながら天使祝詞を三環唱える。つまり百五十回である。これを全部唱えろと言われたのであるから、この男の罪深

さが分かるとういうものである。

解説

本稿は、現代アイルランドの女性小説家、メアリー・ラヴィン (Mary Lavin, 1912-96) の短編小説「結婚」(“A Marriage”) の後半部分の翻訳である。Mary Lavin, *A Family Likeness and Other Stories* (London: Constable, 1985) に収録されており、この翻訳のテキストにも同書を用いた。昨年の長野県短期大学紀要第六五号(二〇一〇年)に掲載された「結婚」(前半)の翻訳の続きであり、今回でこの短編については完結した。

メアリー・ラヴィンその人についての解説は前半の翻訳の後に付しておいたので、今回はラヴィンの作風について簡単に述べておきたい。

ラヴィンは「アイルランドのチェーホフ」と評されることが多いようであるが、チェーホフのように、あるいはイングランドで活躍したニュージールランド出身の先輩女性作家、キャサリン・マンスフィールドのように、人間の内面描写を重んじた心理的リアリズムの短編作家と言ってよいだろう。現に、一九六一年に出版された短編集『大いなる波』その他の物語¹⁾では、キャサリン・マンスフィールド賞を受賞している。

次にこの作品でラヴィンが用いている三つの技法について述べておきたい。一つ目は、地の文で心の内面を語らせる描出話法(または自由間接話法)である。イングランドで初めて意識的にこの技法を用いたのはジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) であると言われているが、アイルランドでもラヴィンの少し先輩に当たるジェイムズ・ジョイスが大いに用いた技法である。ジョイスは短編集『ダブリン市民』(Dubliners, 1914)においてもこの技法を駆使し、人間の内面ドラマを巧みに描いており、『ダブリン市民』に収録された「イーヴリン」(“Eveline”)などは、その半分以上が描出話法による内面描写である。ラヴィンはこの技法を随所でさりげなく活用している。特に、相手の言動

が理解出来ないときに、「一体、どういふつもりなのだ？」のように、心の中で自問自答するような形で用いることが多い。

次に、眠りと覚醒との中間領域を描く巧みさである。これも例えばジョイスは『ユリシーズ』(Ulysses, 1922)の最終第十八挿話で、眠りに落ちてゆくモリーモリーの半覚醒・半睡眠の独白を、数十頁に渡り句読点なしという「夢言語」で描いたことが有名であるが、ラヴィンもそこまで徹底はしないものの、登場人物の意識の流れの中に読者を誘い込む手腕はやはり優れている。今回訳出した「結婚」後半部では、明け方に眠りから覚めかけた主人公のジェイムズが、うつらうつらしながら、妻のエミーと出会った頃のことを回想する場面がある。この半睡眠状態の描写は秀逸で、回想しながら眠りに落ちてゆき、そこからはつと目覚める場面の鮮やかさも印象的である。ジョイスの後をゆく、アイルランド作家らしいところと言ってもよいだろう。

最後に、象徴技法の巧みさである。「結婚」の大きなテーマは「老い」と「死」であると思われるが、前半部の森の中に出てくる湿地の枯れた樹木、そして今回訳した後半部のコンポストは、ともに死と腐敗のシンボルであり、ジェイムズの心の中の「老い」と「死」に対する恐れを巧みに暗示するものである。

しかしラヴィンの魅力はそうした技法だけにあるのではない。例えば「結婚」においては、互いに抵抗を感じる部分を持ちながらも互いを求め合うという、夫婦の悲哀と切なさをリアルに描く高度な心情描写が見られる。また、いつまでも若かった頃の情熱にしがみつくジェイムズと、時の流れと変化をすんなりと受け入れるエミーの、根元的な性差の描き分けも見事である。女性作家でありながら、男性の心理を精緻に描くことができる洞察力も特筆に値しよう。

以上、ラヴィン作品の特徴について簡略に述べたが、「結婚」についてはまた別の機会に詳細に論じてみたい。この「結婚」が収録された『家族の肖像』その他の物語』(A Family Likeness and Other Stories)の翻訳も、これで三分の二作品が終わった(貸家が『中央英米文学』第四一号(二〇〇七年)に、「家族の肖像」

が『中央英米文学』第四二号(二〇〇八年)に掲載されている)。まだ訳出していない残る三作品についても、出来るだけ早く翻訳紹介したいと考えている。